

<b>Title</b>	子どもにおける生と死（共同研究報告：臨床死生学研究）
<b>Author(s)</b>	越智, 裕子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-3 : 23
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2317">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2317</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 共同研究報告

## 【臨床死生学研究】 子どもにおける生と死

2009年6月13日、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室にて第1回臨床死生学研究学会が開かれた。あいち小児保健医療総合センター診療科病棟保育士/HPSJapanの田中久美子氏を講師にお迎えした。参加人数は28名であった。

本講師は、「子どもにおける生と死」の理解を深めるため、200床ある診療科病棟の保育士として、病棟を利用する虐待児などの事例を中心に紹介している。

本講師は、子どもにとっての生と死は、①食欲、②睡眠欲、③居心地、④楽しみ、⑤嬉しさ、⑥探究心の充足で、安全基地、基本的要求の充足、自己肯定感の確立なされるか否かによるとしている。また、病棟の保育士の仕事として、①入院生活におけるストレスや不安の緩和、②子どもの個別要求の充足、③信頼関係、④安心の場、⑤興味関心の拡大、⑥対人関係性の構築や学習、⑦退院後の生活確保などを上げている。そして、子どもにとっての遊びを「健康な子供時代の基本的な部分である。遊びを通して子どもたちは言葉が発達し、関係性に気づき、新しい課題を習得する。遊びは感情のはけ口であり、ストレスとうまく処理するのを助ける」ことと定義づけ、「虐待を受けた子どもの心理」には、身体的・心理的苦痛への対処、悲しみの癒す場所、生きる拠り所、自己表出の機会、現実認識、自己受容、情緒的葛藤に立ち向かう力、成長・発達を促す必要性があり、それを遊びの要求を通し、支援を施すことの重要性を訴えている。

「事例検討」では、この病棟に入院をする10代前半の障害児、4事例を紹介している。いずれも、虐待、自死、自殺未遂など多問題家族を背景に、意志の伝達が苦手、友人関係がうまく築けない、喧嘩が絶えない、非社会的行動などといった状態像を示している。本講師は、彼らに遊びを通じ、

目に見える形で安心・自己肯定感などを与え、潜在的な能力の発見や助長を促している。しかしながら一方で、彼らは、依然不安定な感情など不健康な部位も残しており、これに対し、病棟保育士の今後の課題として、①乗り越える課題の個別性、②様々な背景・病気を持つ子どもの共同生活への関わり、③将来を見通した関わり、④他職種との連携、⑤地域の学校との連携、⑥家族を中心としたサポートの重要性と困難、⑦子どもを中心としたチーム医療/家族ケアの必要性を上げている。また、「虐待を受けた子供へのケア」として、外傷や栄養障害は短期的な治療と同時に、年数をかけた心の回復の重要性を上げ、その対応として、大人から愛され、尊重されることが必要であると述べている。また、親へのケアとして、①虐待の背景、②現実生活からくるストレス、③夫婦関係。環境など、④過去の被虐待体験、⑤子ども側の要因（育てにくい・多動・障害など）などへのケアが必要とし、子どもと親を中心にした、インフォーマル、フォーマルな個人、集団が支援を行っていることが重要であると考えている。

（文責：越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程

（2009年6月13日 新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室）